

會員消息 (その二)

城山の蝶を思うて 千葉 小野 盛雄

(前巻)

こちらに来て、早ゆ一か年余を夢の如く無為に過してしまいましたが、千葉市一帯では、山なく河川なく、変化に乏しいので、風光明媚な佐伯地方のことが、常に脳裏から離れません。

こちらに来て感じたことは、佐伯地方は、野鳥や蝶類空庫だと思えます。城山の蝶類だけでも、ヒヨウモン・シジミ・セセリ・揚葉・夕テハ類など、数えきれない程の種類がいます。ちよつと目をひくツマグロヒヨウモン・メスグロヒヨウモン・ルリ夕テハ・アサギマダラ・スミナカシ・イシガキヨウ・ヒオドリキヨウなども観察できました。黄蝶や紋白蝶同様に、どこでも見ることができそうで案外見ることのできないツマキヨウや、三の丸の橋のたもと、同登山口を二丘位入ったところ、初めて見ました。その時の喜びを今でも忘れません。

佐伯はまた、石造文化財の空庫とも思えます。一歩戸外に出れば、立派な石造物を拜見することが出来ます。下総は石無き国——といわれるように、石持皆無の土地です。その故か、大変少ないようです。佐伯をばなれて益々、佐伯の美点を、切々として感じます。

しかしながら、こちらにも、日本武尊・弟橘媛の伝説をはじめ、豊富な史実や伝説があります。千葉市内に國鉄の蘇我駅(そがえき)があります。弟橘媛が尊のため、身を海神にささげた後、この付近に漂着、潮もなく蘇生して、「我れ蘇れり」と言った——それがこの土地の名となり、現在の蘇我町であり、所収のソガ神社は媛

が祭神です。古い時代からの社の由、松の疎林あり海浜をしのびせれますが、かつての海岸は埋立てられ、京葉工場地帯となっています。(後巻)

(附) 有るほど城山は徒歩の文倉だけでは足りないですね、石造文化財もそうですね。

弟橘媛の伝承があること、ばらめて知りました。(註)

會員消息 (その二)

沓江高山海岸 竹野 清河 吉田 勝一

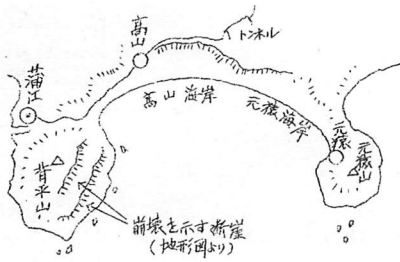
(前巻)

昨年は先生の手巻力によって町史ができて、町民皆其の史作に感謝の意を表しています。今後は何時〜迄も所史は保管される事と思えます。

それについて、元猿・高山海岸の、今から百五十年位以前からの地形変化について、書きしるしておきたいことをおしらせします。

町史には、昔の地震のことが書いてありますが、その時に、沓江のせびら山の約四分の一が海にくずれ込み、其の山の土が高山・元猿・沓江又内の新高敷地付近迄が一面の海で、沓江行の通路は、現在の高山地又は海岸の上の山の中を通行せしめていたことは、今も古い道が仄々残っています。

現在の砂浜は、百五十年か二百年前が全部海であったことは萩等の祖母達より言い伝えられています。自然の地形の変更として、町史ではあまり割らないことで、町



史に書き残したか、たと思つて書いて見ました。

(後巻)

(中)

この祖母さんから伝へ聞いてゐることは大変価値あることで、シーズンを迎えている高山元嶽海岸の、宝永四年(約三〇年前)又は、安政元年(約百五十年前)の大地震によるもので、海岸に立てば背平山崩壊の姿よくわかります。斯文に書き残したことは非常に惜しいことでした。

(附)

覚書

思い出のわらべ唄

会員 平川 マサ

先般の物故会員懸霊祭の折には、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

昨日、佐伯史談第一二三号を受取り、夕方でしたがつくづく読及ふけり、夕食の時間が一時測れなくなりまして。

「一台殿 台殿」の唄は、私達も子どもの頃は、火鉢をかこんでよく遊んだものでした。それがどういふ意味か、ちっとも知らず、ただ口覚えに覚えておりましたので、「源八そこ退け」のところを「そこぬけ」と唄っておいまして苦笑しております。今、矢田掾の文章を読みまして、はじめの意味がわかりました。私達は郷土のことは勿論、いろいろなることを、子から孫へと伝えて行く責任があると思ひます。

私は、佐伯市教育委員会の乳幼児学級のお手伝いをやっておりますが、三才児の子ども達と、二時間余りを遊ぶ時、昔私達が遊んだ佐伯の遊びや、唄を取り入れておりますが、勉強する母親達が、大部分はよそから入って来られた方が多いのでどうかと思ひますが、佐伯に産まれた唄を唄ったよ、と思ひ出してくれる子どもが居

たら幸いです。

「いちく たいちく」の唄は、まだ他の人達からも投稿があると思ひますので、まちがいないとこゝは訂正して下さい。

いちく たいちく たいのまいの おちよこは
いくたいな はしのいとくしうぶは だれがうえ
たしよぶじや いったいどか たいどか たいどか
うえたしよぶじや げんばち そのわけ
たろうざえもんよ

ついでに、佐伯の「かごめ かごめ」を紹介します。よその人が入り込んだと、マスコミの祭事で、かごめかごめも今では変つてしまいましたが……。

かごめ かごめ かごめ 朝日のひかり かがやくとき
は うしろはおれ
ここで鬼は後の人をつかまえて、その子から一人づつ四拍子で順に指さして唄います。

ひとんこ ふたんこ さんめのこ よつて なかの
くそのかみ たれが おとを そろえるか
このひとさんが そろえるよ

この「そろえるよ」の「よ」で次の鬼がきます。この「ひとんこ ふたんこ」の唄はあつくり唄ひますので、何かしら情緒があり、夕やけの空を見ながら唄いたい唄です。こんな美しい唄なのに、どうして「くそのかみ」なんていうことばがあるのか、不思議でなりません。

(後略)

夫れれもふるさとのもの、何とか後に残したいものです。こうして「佐伯史談」にとり上げさせていただきます。郷土の歴史や文化を大事に思つてゐる人達、五百余の会員の書架に、いっまでお送りします。(編集者)